

司書・司書教諭課程室TAを通じて

大学院 文学研究科 独文学専攻 博士前期課程2年
松澤智子

昨年度に引き続き、司書・司書教諭課程室のTAとして勤務した。二年目ということで、全体的な流れも分かっていたので、大きな緊張も無く、業務を行うことができた。

昨年度は、明治大学リバティアカデミーが毎年夏季に開催している「図書館司書講習夏期集中講座」の講義で、およそ10日間、パソコンを使った講座の補助業務をする機会を得た。私自身、知識も少なく不勉強なところもあり、補助をするには未熟であったが、受講生の方々が懸命になっている姿を見ると、かつて自分が勉強していたころを思い出すことができたので、講座の補助業務の話をいただけることを、楽しみにしているところもあった。しかし、今年度は修士論文執筆のために2日間しかこの講座で手伝いができず残念であった。

今年度は、『さまざまな専門図書館』が、新たなDVD教材として制作され、その郵送作業をする機会が多かった。このタイトルは、かつて私が大学図書館に勤めていた頃を思い出させてくれた。レファレンスを担当していたが、幅広い調査依頼があり、まったく知らない分野の調査も行っていた。調査を進めると、その分野の専門図書館を見つけることが多々あった。この様な時は、強力な助人を見つけた気分になり、嬉しくなったことを覚えている。

私は専門図書館に興味を持ち、時間を見つけては、各分野の専門図書館に足を運ぶようにした。図書館だけではなく、一般の人が利用できる資料室などにも範囲を広げた。美術館の一角に設置されていたり、マンションの一室のような場所であったりと、初めて利用することが多く、躊躇してしまうこともしばしばであった。

専門図書館に行くと、普段は目にしない様な資料が多く、胸が高まっていくのが分かった。特に充実しているのは、統計関係の資料であった。統計は、ある年の一冊だけあっても意味をなさない資料である。毎年のデータが全て見られ、初めて意味を持つ資料と言えよう。また、その分野における他国の情報も充実しており、専門図書館の強みを実感した。

この様に、他大学図書館も含め専門図書館に行くようになったのは単に興味だけではなく、レファレンスの回答や相談をされた際に、これらの図書館を紹介できるからである。実際に見て来た図書の場合は、住所だけではなく、外観や内観、資料の充実さ、どの様な雰囲気であるかも伝えられる。自信を持って話すことで、依頼者に安心を与え、私自身は信頼を得られる、という思いがあったからである。

当時行きそびれた専門図書館があり、数年経ってもその名が記憶に残っていた。それは、中野にある矯正図書館であった。今年度のシンポジウムで、矯正施設の取り組みを聞く機会があり、TAに就くことができ良かったと、強く感じると同時に、明治大学司書・司書教諭課程のカリキュラムの充実さを再確認した。この課程を履修している学生たちの満足度に、わずかばかりでもTAが貢献していることを願っている。

ちなみに、私が刑務所内に図書室があることを知ったのは、映画『ショーシャンクの空へ』である。この作品は、現在、私の人生におけるベスト映画の一つである。ついでながら、『薔薇の名前』も、図書館好きにはオススメの映画である。